

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：17501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780394

研究課題名(和文) 学校インターンシップ体験が学生の実践的指導力に与える影響についての実証的研究

研究課題名(英文) The effect of school internship in teachers colleges.

## 研究代表者

森下 覚 (MORISHITA, Satoru)

大分大学・教育学部・准教授

研究者番号：60595320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教員養成系大学で行われている学校インターンシップの効果について、実証することを目的とした。本研究では、学校インターンシップ体験内容の調査、学生の実践的指導に関する自己評価の調査、そして実践的な指導に関する実証実験を実施した。その結果、学校インターンシップ体験は、児童との関係性をより寄り添ったものに変え、模擬授業のパフォーマンスを児童に寄り添ったものへと変えることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to verify the effect of school internship in teachers colleges. The present study investigated the experience in school internship, the self-evaluation of educational skills of themselves and the educational skills in the trial lesson. The results were: the experience in school internship were the effect in developing a close relationship between students and children, and the performance in the trial lesson.

研究分野：教育心理学

キーワード：学校インターンシップ 学習 パフォーマンス

### 1. 研究開始当初の背景

いじめ、不登校、学力低下等、学校を取り巻く諸問題は、その言葉こそ世間に浸透して久しいが、その社会的背景は変化しつづけ、その実態を把握することすら難しい状況である。また、団塊世代の教員の大量退職に伴い、今後10年で約35%の教員が入れ替わることが予測され、経験の浅い教員の割合が急激に増えることが懸念されている。こうしたことから、これから教育現場に出て行く教員志望の学生には、子ども達に確かな学力を身につけさせられる教科指導とともに、学校組織の一員として連携しながら対応していく生徒指導がより求められるようになった。このような力は、総じて「実践的指導力」と呼ばれている。

また、大学の学部段階の教職課程において、教員として必要な実践的指導力を身につけさせるためには、教員養成カリキュラムの改善・充実が急務とされており、そうした改善策の一つとして注目されている取り組みが「学校インターンシップ」である。学校インターンシップは、教育職員免許法に基づく教育実習とは別に設けられた教育活動の体験的プログラムであり、学校組織の中でより実践的な活動に従事することが期待されている。

その一方で、学校インターンシップの体験やそれによって身に付く実践的指導力は、単に学生個人を分析対象としても明らかにならないことが理論的に指摘されている(Cole, 2002; 佐伯, 1998)。先行研究において実践的指導力の分析が十分になされてこなかった主な理由は、これまでの研究成果で示したような学校インターンシップの社会的環境やその関係性を明らかに出来なかったことにある。そこで本研究は、継続的に学校インターンシップにおける学生の体験・認知・環境を加味した上で、学生の実践的指導力という社会的構成概念を実証的に分析することにした。

### 2. 研究の目的

本研究は、学校インターンシップにおける体験に注目し、学校インターンシップ体験が学生の実践的指導力に与える影響について、調査・実験を実施し実証的に明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 調査対象者

A大学の教員養成課程に所属し、A大学の学校インターンシップに参加した学生19名(体験群)参加していない学生19名(統制群)であった。および、A大学の学校インターンシップのフィールド調査として、学校インターンシップに参加している学生84名を調査対象とした。A大学の学校インターンシップは、学部3・4年生を対象にした選択授業として実施されている。毎年60名程度の

学生が参加しており、活動は9月～3月までの期間で継続的に行われている。

#### (2) 調査・実験の構成

本研究は、調査1「学校インターンシップにおける体験の調査」、調査2「実践的指導力の自己評価の質問紙調査」、実験1「実践的指導力の実証実験」によって構成されている。

調査1の調査項目は、活動回数と各回の活動内容、及び春原(2008)やLave & Wenger(1991)を参考にした学校インターンシップ体験項目(教育体験に関する項目23項目、正統的周辺参加体験に関する項目22項目)であった。

調査2の調査項目は、森下・麻生・長谷川・河野(2012)における実践的な指導力についての自己評定項目(授業実践に関する13項目、生徒指導に関する8項目、教育臨床に関する7項目、教師の資質に関する5項目、児童生徒理解に関する3項目)を採用した。各項目に対して、「1:当てはまらない、2:あまり当てはまらない、3:どちらでもない、4:やや当てはまる、5:当てはまる」の5件法で回答を求めた。また、学校インターンシップの活動期間や、これまでの模擬授業練習回数の回答を求めた。

実験1は、体験群と統制群に対して実施された。調査内容は、国語・算数・理科・社会の模擬授業(15分程度)であり、動画で録画した。そして、野中(2011)の授業中の姿勢の採取を参考にし、録画した授業動画から1秒毎に授業画像を作成し、分析対象とした。

#### (3) 調査・実験手続き

調査1は、平成25年9月～平成26年3月および平成26年9月～平成27年3月の期間に実施した。体験群に対して、各回の学校インターンシップ活動が終わって1週間以内に、活動内容について専用HPに記入して報告するように求めた。また、全ての活動が終了した後、専用HP上で学校インターンシップにおける体験についての質問紙調査への回答を求めた。

調査2は、平成26年4月～9月、平成27年4月～9月および平成28年4月～9月の期間に実施した。実験1を実施するために集めた対象者に対して、質問紙を配付し回答を求めた。

実験1は、平成26年4月～9月、平成27年4月～9月および平成28年4月～9月の期間に実施した。各対象者には、事前に国語・算数・理科・社会の教科の中から、任意の科目と単元を選択し、模擬授業計画を立てるように指示しており、実験当日は15分程度で計画してきた模擬授業を実践するように指示した。模擬授業は、対象者が授業者となり、子ども役はいなかった。模擬授業は、動画で撮影した。

### 4. 研究成果

#### (1) 調査1の結果

調査 1「学校インターンシップにおける体験の調査」の結果、活動合計回数は 223 回(1 人あたり平均 11.7 回)であり、8 割以上の活動内容が授業中の学習支援であったことが明らかになった(表 1)。

表 1 学校インターンシップの活動内容の平均・SD と割合

	平均(SD)	割合
授業中の学習支援	9.7(4.0)	82.5%
給食・掃除などの指導	1.3(3.0)	11.2%
特別な支援が必要な児童生徒の支援	1.1(3.1)	9.0%
行事の準備、参加	0.9(1.5)	7.6%
休み時間中の遊び	0.3(0.9)	2.2%
研究授業への見学	0.2(0.4)	1.8%
教材や掲示物作り、環境整備	0.1(0.3)	0.9%

活動合計回数 223回

続いて、学校インターンシップ体験について問う 45 項目に対して項目分析を行い、天井効果とフロア効果が見られた項目を削除した。その後、主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、5 因子を抽出した。第 1 因子は、「他のサポート学生の教育的な振る舞いを真似した」、「他のサポート学生の言動に教えられた」、「指導に関して、他のサポート学生からのアドバイスを取り入れた」などの 6 項目からなる。これらの項目は、他者を参考にし、自らの実践を改善する体験を表す項目であると考えられたため、第 1 因子を「他者参考体験」因子と命名した。第 2 因子は、「サポート校の教師の教育に対する信念を、共有することができた」などの 6 項目からなる。これらの項目は、現場の教師との価値観や考え方を共有する体験を表す項目であると考えられたため、第 2 因子を「教師との価値観の共有体験」因子と命名した。第 3 因子は、「うまく授業することが出来た」などの 4 項目からなる。これらの項目は、教育実践に関する成功体験を表す項目であると考えられたため、第 3 因子を「教育実践の成功体験」因子と命名した。第 4 因子は、「子ども達と信頼関係を築くことが出来た」などの 4 項目からなる。これらの項目は、学生と子どもとの親和体験を表す項目であると考えられたため、第 4 因子を「子どもとの親和体験」因子と命名した。第 5 因子は、「友達との関係の中で学んだ知識や技術が、教育活動の中で活かした」などの 4 項目からなる。これらの項目は、既存の知識や技術が教育実践に活用できた体験を表す項目であると考えられたため、第 5 因子を「既存の知識・技術の活用体験」因子と命名した。その後、各因子の項目

の平均値を算出し、因子間の相関を算出した(表 2)。

表 2 因子間相関と平均・SD

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	平均(SD)
第1因子		.17	.32*	.02	.11	2.68(0.98)
第2因子			.19	.23*	.27*	4.00(0.65)
第3因子				.12	.19	2.60(0.81)
第4因子					.25*	4.24(0.46)
第5因子						3.60(0.74)

\*  $p < .05$

第 1 因子が第 3 因子と有意な正の相関を示していた。このことから、学校インターンシップにおいて、自分以外の学生と一緒に活動に参加することは、相互の活動を参考する体験を生み、教育実践の成功体験につながっていたことが示唆された。また、第 2 因子が第 3、第 4 因子と有意な正の相関を示していたことから、教師との価値観を共有する体験が教育実践の成功体験や子どもとの親和体験の上に生まれていたことが示唆された。また、第 4 因子が第 5 因子と有意な正の相関を示していたことから、子どもとの親和体験は学生の既存の知識や技術を活用した上で生まれていたことが示唆された。

### (2) 調査 2 の結果

調査 2「実践的指導力の自己評価の質問紙調査」の結果、調査対象者の模擬授業練習回数の中央値は 20.0 であった。そのため、20 回を基準として練習頻度低群(20 回未満=16)と練習頻度高群(20 回以上:  $N=22$ )に分類した。そして、練習頻度(低群・高群)と学校インターンシップの体験(有・無)を独立変数、実践的な指導についての自己評定項目(授業実践・生徒指導・教育臨床・教師の資質・児童生徒理解)を従属変数とした分散分析を実施した。分散分析の結果、生徒指導の自己評定について交互作用の有意傾向がみられた( $F(1,34)=4.15$   $p < .10$ )。交互作用が有意傾向であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、練習頻度高群における学校インターンシップ体験の単純主効果( $F(1,34)=4.32$   $p < .05$ )が有意であった。以上の結果から、学校インターンシップを体験した後に模擬授業の練習を積むことで、生徒指導に関する自己評定が高まる傾向にあるといえる。

### (3) 実験 1 の結果

実験 1「実践的指導の実証実験」は、体験群 19 名、統制群の 19 名に対して実施された(表 3)。その結果、体験群において平均 932 姿勢、統制群において平均 955 姿勢を抽出することが出来た。調査 2 の結果を踏まえて、練習頻度が高い対象者における学校インターンシップ体験有り群と無し群の姿勢を比較した。その結果、学校インターンシップ体験有り群の方が、黒板に顔を向けている姿勢が少なく、机間巡視を多く行い、児童の目線に合わせてしゃがんでいる姿勢が多いことが明らかになった。

表3 模擬授業の教科

	体験群 (N=19)	統制群 (N=19)
国語	5	4
算数	4	5
社会	5	5
理科	5	5

(4) 総合考察

以上、調査1・2、実験1の結果を総合的に考察すると、学校インターンシップの体験は主に授業中の学習支援活動であるため、生徒指導に関する実践経験を多く積んでいることが考えられる。さらに、そうした経験は、授業中の児童のイメージとして残っているため、模擬授業を行う際に、児童の方を見て授業を行う姿勢や、しゃがみながら児童の目線に合わせて机間巡視を行う姿勢が多くとられていたと考えられる。

模擬授業は、目の前に子ども・教材・教室など授業の資源が存在しない状況で、単に授業者が一方的に話をするだけでなく、授業者が教室にいる子ども達の表情、姿勢、心情をイメージし、その上で授業という場をパフォーマンスするものである。そのため、模擬授業の授業者の姿勢には、目に見えない教室・教材・子ども達とのどのような関係性を構成したいと考えているのかがあらわれており、同時に自分という存在がどういう教師でありたいと思っているのかがあらわれている。つまり、今回の調査や実験で見られた体験群と統制群の差は、単なる個人の指導技術の習得ということではなく、授業者と子ども・教材・教室など授業資源との関係性の変化であり、授業という場を構成するパフォーマンスの変化として捉えることが出来る。

以上のことから、学校インターンシップ体験は、児童との関係性をより寄り添ったものに変え、模擬授業のパフォーマンスを児童に寄り添ったものへと変えることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

森下 覚 大学と教育委員会による学校インターンシップの構築と変遷 大分大学教育福祉科学部紀要 第37巻第2号、2015、287-300

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森下 覚 (MORISHITA, Satoru)  
大分大学・教育学部・准教授  
研究者番号：60595320

(2) 研究分担者  
なし

(3) 連携研究者  
なし

(4) 研究協力者  
なし